

たとえリセットされても

自分とは違うもの

5年 Y・Aさん

逆瀬川先生は自分とは違う愛という存在を絶対に受け入れようとしません。先生は言う。「人間には、人間でなければ、できないことがあるのです。命は尊いのです。ロボットには代えられません。」

しかし、今でも私達はAIやロボットにかまれていて、そのうち人間型AIロボットと暮らす日もくるだろう。私達はAIやロボットと共存していかねければならないのだ。

でも、もし友達がAIロボットだったとしたら、私は柚果のように受け入れることができるだろうか。人にとって自分と違うものを受け入れるのは難しい。相手が自分よりすぐれているとなるとなおさらだ。

はるねも愛を受け入れようとしなかった。自分とは違い、何でもできる愛にしようと、傷つけるような言葉を愛に言った。でも、はるねは気付く。自分ができないことを愛ができるのは愛の問題ではなく、自分の問題だということに。そしてはるねは愛に謝り、友達になる。自分とは違い、自分よりすぐれているものを受け入れるには、広い心が必要だ。はるねにはそれがあつたのだ。

でも、ここで私は思う。全部が全部はるねより愛がすぐれているわけではなくて、はるねの方がすぐれていること、はるねにしかできないこともあるはずだ。AIだって万能ではない。

AIロボットである愛はお母さんにとって生きていくうえでの心の支えだ。愛がいるからこそ、お母さんは生きていける。でも、お母さんがいなくなったら愛も止まってしまう。つまりことがあってもお母さんが毎日仕事を頑張る、ちゃんと家に帰ってくるからこそ、愛は充電してもらえ、メンテナンスマも受けられる。それぞれにしかできないことがある。

私と友達の関係もそうだ。私は父が日本人で、母が中国人だ。そのせいもあって、中国人の友達がたくさんいる。中国人の友達は私と違って頑張り屋さんなので、勉強がすごくできる。算数も理科も社会も、いつも私よりいい点数だ。でも、国語だけは私だって負けていない。私が国語のテストでいい点数をとると、友達は「Yちゃん、すごいね。」とほめてくれる。分らないところを教えてあげると、「教え方がうまいから、すぐよく分かったよ。」と喜んでくれる。お互いを認め合い、足りないところを補い合うから、私達は友達でいることができる。AIと人間の間関係もそうなのだと思う。お互いの得意分野で力を発揮し、補い合うからこそ共存できる。

はるねがこれまで愛に自分がしてきたことを「愛ちゃん。ごめんね。」と謝る。愛は「だいじょうぶだよ。」と答え、「はるねちゃんは、友だちだから。」と続ける。はるねは愛を抱いた。この本の中で私が一番好きなシーンだ。私も相手との違いを受け入れられる広い心を持ちたい。そして、自分ができることに自信を持って生きていきたい。